

【論文提出者】 社会文化科学研究科 公共社会政策学専攻 公共社会形成論講座
社会規範論分野
加藤 佐和

【論文題目】

The moral status of human embryos and fetuses: Analysis of the utilitarian approach
(ヒト胚・胎児の道徳的地位—功利主義的アプローチの分析—)

【授与する学位の種類】 博士（学術）

【論文審査の結果の要旨】

加藤佐和氏の論文 The moral status of human embryos and fetuses: Analysis of the utilitarian approach (邦訳: ヒト胚・胎児の道徳的地位—功利主義的アプローチの分析—) は、胚の選別、中絶、ES細胞作成等の生命科学研究、重度障害の新生児の扱い等における主要な争点であるヒト胚と胎児の道徳的地位についての諸議論を検討するとともに、ヒト胚や胎児を別個にではなく一貫して取り扱うための倫理的枠組みを提示することを目指している。これまでの生命倫理学を含む倫理学では、人格とされる判断能力のある成人を主たる考察対象としてきたこともあり、論理的に首尾一貫しつつ科学的知見やわれわれの道徳的直観に適うような理論が見出せないのが現状である。本論文は R. M. ヘアの功利主義に基本的に依拠しながら、ヒト胚、胎児の道徳的地位に関する独創的な視点を提示するものである。

第一章では「道徳的地位」、「初期胚」、「ヒト胚」、「胎児」等の意味とともに、ヒト胚、胎児の発達過程、とくにその中で重要とされる受精、着床、個体としての成長の開始時期、胎動、誕生等について医学的見地から述べられる。続く第二章では主要な倫理学理論や立場においてヒト胚や胎児がどのように扱われるか概観される。ここでは、カトリックに由来する生命の神聖性(SOL: Sanctity of Life)の立場、カントの義務論、フェミニズム、パーソン論、徳倫理、功利主義が考察対象とされる。第三章では功利主義とくに、快楽主義型ではなく選好充足型功利主義の立場でありかつ直観的レベルと批判的レベルの二層構造を組み込み、ヒト胚、胎児を潜在的人格として扱う R. M. ヘアの功利主義が、ヒト胚、胎児を一貫して扱う最も有力な立場であるとされる。ただし、ヘアの功利主義はヒト胚、胎児だけでなく、任意のペアの精子と卵子も潜在的人格とみなし、かつ新生児もまだ厳密には生への選好を十分に持たず潜在的人格に分類される。この立場によれば、選好充足を最大化するために、ある存在を抹殺して別の存在を生み出すという潜在的人格間での置き換えが可能となる。しかし、胎児を中絶して新たに妊娠することや、新生児と将来の子どもの置き換え、男児と女児の産み分け等は道徳的直観に反する面を持っており問題を孕んでいる。第4章ではヘアの置き換え可能性テーゼが検討対象とされる。そのテーゼへの批判としてロックウツの個体同一性論、P. シンガーの存在先行説が検討されるがいずれも欠陥を持つものとされる。以上を踏まえて、第5章では既存の枠組みを大きく超える提案がなされる。その骨子は、人格をアクチュアル、セミ・アクチュアル、ポテンシャル、セミ・ポテンシャル、ポッシブルの5種類に分けることであり、分類の基準はヒト胚、胎児の医学的見地からの区分(受精、個体としての成長の開始時期、母体外生存可能となる時期、誕生)と、子どもを持つことを決断する時期に依拠する。これは従来にはないまったく新しい視点であり、これにより上述の諸問題を考察する有力な倫理的枠組みが提示されたといえる。

本論文は生命倫理学の主要テーマの一つであるヒト胚と胎児の道徳的地位に関して、先行研究を踏

まえかつ首尾一貫した論述を行うとともに、潜在性についての独創的な視点を提示しており、ヒト胚、胎児論議を大きく前進させるものである。

以上から、本論文が熊本大学大学院社会文化科学研究科の博士論文として適格であると判断する。

【最終試験の結果の要旨】

上記の者に関して、平成23年6月29日（14:30-16:00）、文学部小会議室において口述試験を実施した。

また、上記の者は、同日（16:30-17:30）、文法棟A3教室において、学位論文に関する公開発表会を行った。

その結果、上記の者は、提出された論文に関する専門領域について、すぐれた学識を有し、自立して研究を行う能力が十分にあると判断され、審査委員会は、博士（学術）の学位を授与するに値すると判断した。

【審査委員会】

主査 高橋 隆雄

委員 田中 朋弘

委員 中川 輝彦

委員 岡部 勉

委員 岩岡 中正